

優秀賞

親切な社会の一員として

京都府 京都教育大学附属京都小中学校初等部 四年 鈴木文華

一年前、私の母のおなかには赤ちゃんがいました。ある日、私と母は電車に乗って出かけることになりました。母は、「なにかあったら困るから」と、見なれない小さなキーホルダーのようなものをバッグにつけました。それは、「マタニティーマーク」といい、おなかに赤ちゃんがいるお母さんがつけるものだそうです。

「なにかあって？」私が聞くと、母は難しそうな顔をしながら、

「お母さんの具合が悪くなったときに、赤ちゃんがいる人だって気づいてもらえたら、助けてもらえるかもしれないからね。」

と言いました。でも、私は不思議でした。それなら何で今までつけなかったのだろうと。

電車に乗ると、私は母を席に座らせてあげたくて、空いている席を探しました。でも、席はまったく空いていません。

「お母さん大丈夫？それ見せたら？」

「しーっ。いいの、いいの。大丈夫だから。」

そんなやりとりをしていると、近くに座っていたおばさんが、母のマタニティーマークをチラッと見て、

「気づかなくてごめんなさい。座ってください。」

とやさしく声をかけてくれました。私は、母を座らせてあげることができてうれしくなり、マタニティーマークの力はすごいと思いました。

でも、母はおばさんにお礼を言って座ったあと、小さな声で私にこっそり言いました。

「今みたいに親切にしてくれる人もいれば、このマークを見て、病気じゃないのに、っていやな気持ちになる人もいるの。だからあまり見せたくないのよ。」

母の言葉を聞いて、私は信じられない気持ちになりました。妊婦さんはおなかの赤ちゃんの命を守っています。その妊婦さんの周りの人が、気持ち良く助けてあげることが難しいことなのでしょうか。マタニティーマークをつけることは迷惑なのでしょうか。

それから少して、学校帰りに電車の席に座っていた私は、前に立っているお客さんの中におなかの大きな女の人がいることに気がつきました。すぐにマタニティーマークを探しましたが、マークは見つかりません。隣に座っているおじさんも、スマホを見ているお姉さんも、みんな気にしていないようでした。

(もしかしたら妊婦さんじゃないのかもしれない。でも、ただマークをつけていないだけかもしれない。)

私はどうしようかと迷いましたが、女の人に座ってもらえるようにそっと席を立ちました。すると、私の後ろで、

「どうもありがとう。」

という声が聞こえました。突然のことにドキッとして振り向けなかったけれど、私の心はとても温かくて、幸せな気持ちになりました。

この経験から、私はマタニティーマークがあるか、ないかではなくて、妊婦さんに親切にすることが当たり前なのだと考えました。そして、妊婦さんとおなかの赤ちゃんを助けられる親切な社会の一員として、協力していきたいと思っています。